

マルコによる福音書3章 「神の国、神の家族づくり」

1A 安息日における癒し 1-6

2A 全国から来る群衆 7-12

3A 十二使徒の任命 13-19

4A 新しい国と家族 20-35

1B 宗教指導者の中傷 20-30

2B 家族の無理解 31-35

本文

マルコによる福音書3章を見て行きます。私たちは前回、安息日に弟子たちが穂を摘んでいるのをパリサイ人が咎めたことで、ダビデの例を使って神の憐れみが律法の要であることを語られました。イエス様が、福音を伝え、そこに憐れみの行いがあり、それによって人々が解放されていく姿を見て行っています。

1A 安息日における癒し 1-6

1 イエスは再び会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。2 人々は、イエスがこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。

再び、とマルコは書いていますが、1章21節でイエス様がカペナウムの会堂で教えられていたところを読みました。そこで人々は、悪霊につかれている人が現れたけれども、イエス様が追い出すのを目撃して、これは権威ある新しい教えだと言って驚嘆したところを見ました。その会堂に再び戻って来たということです。そして「人々」とありますが、話を読み進めればパリサイ人たちのことを指しています。

3 イエスは、片手の萎えたその人に言われた。「真ん中に立ちなさい。」4 それから彼らに言われた。「安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。」彼らは黙っていた。5 イエスは怒って彼らを見回し、その心の頑なさを嘆き悲しみながら、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになった。

午前礼拝でお話した通りで、イエス様が福音を伝え、憐れみを示されました。神は休まれることなく、疲れることなく、いつも私たちのために働いてくださいます。しかし衝突したものがありません。彼らの定めていた安息日です。イスラエルの民にとって、安息日は神との契約の印であり、他の民族と区別するもの、聖なるものとするものでした。しかし、神はそれについて、働いてはならないという掟を与えられただけで、具体的なことは、それほど明らかにしませんでした。けれども後世

になって、何をもって労働であるのかを解釈を始めて、それが病気や怪我の人は、命に別条がなければ、治療してはいけないというものがあったのです。

安息日の掟を守ろうとするがばかりに、かえって安息日の主であられるイエス様を彼らは裁いてしまいました。イエスこそが、安息日の本質を成就される方であり、イエス・キリストにあって神の創造の完成を喜び、そこに安息を本当の意味で得ることができます。そして今、この片手の萎えた者にとっては、まことの神の到来、手が伸びたこと、元通りになったことによって、そこにある解放と救いと喜びは、神の安息を祝うのにこれほど適切なものはないでしょう。

6 パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。

ヘロデ党とは、ユダヤ教の一派というよりも、ヘロデ家に対して同情を感じているユダヤ人のグループです。ヘロデはローマの保護を受けていますから、親ローマであり、パリサイ派は異教徒のローマの支配を、ユダヤ人に対する虐げとっていましたから反ローマです。けれどもパリサイ派は、一般民衆に対しては宗教的な支配力は持っていたものの、政治力はありませんでした。そこで、政治力のあるヘロデ派に、ガリラヤ地方全体の秩序を乱しているイエスを何とかして葬り去ることはできないかと相談したのです。イエスをそこまで敵視していたために、敵とも仲良くしたのです。敵の敵は味方ということです。

なぜそこまで彼らを頑なにしたのでしょうか？パリサイ人たちの罪は、何でしょうか？自分を正しいとすることです。これはカインの殺人の罪の時から始まりました。自分が良かれと思って、自分の畑からの作物を主に捧げたけれども、それは受け入れられず、しかし神の方法で羊を捧げたアベルは受け入れられました。それで彼は怒り、妬み、落ち込みました。主が、罪を治めないといけないと命じられたにも関わらず、カインはその感情を抑えることをせず、そのままアベルを殺しました。そしてイエス様は、宗教指導者たちに最後の週で宮の中で、アベルからザカリヤまでの、正しい人の血が、すべてお前たちに降りかかることになるかと宣告されたのです(マタ 23:35)。自分を正しいとする心が、これだけ心を頑なにし、神の働きを殺してしまうほどにするのです。

2A 全国から来る群衆 7-12

7 それから、イエスは弟子たちとともに湖の方に退かれた。すると、ガリラヤから出て来た非常に大勢の人々がついて来た。また、ユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうや、ツロ、シドンのあたりからも、非常に大勢の人々が、イエスが行っておられることを聞いて、みもとにやって来た。

イエス様は、そこに居続けたら危険があると感じたのでしょう、そこで湖のほうに再び退かれました。そこに行けば、少し息をすることができると思われたのでしょう。ところが、ガリラヤ中から人々

が押し寄せてきました。そして広域から、とんでもない数の人々が押し寄せてきます。シーズン中の超満員のディスニーランドみたいになっているのではないのでしょうか？いや、もっとずっと狭いので、もっとごった返してきたと思います。

ガリラヤだけではなく、エルサレムからも来ました。ユダヤ教の中心から来ました。そしてその南に、エドム人の子孫であるイドマヤからもやってきていました。彼らはユダヤ教への改宗者たちです。そしてヘロデ家の者たちもイドマヤ人です。ですから、パリサイ派もヘロデ党の者たちも、自分たちはイエスを何とかしたいと思っていたのに、彼らの思惑とに反して、彼らの地域からもどんどんやって来ていたのです。そして、ヨルダンの川向うとありますが、これはデカポリスの一部とペレアのことでしょう。ペレアはヘロデ・アンティパスの領地です。デカポリスは、十の自由都市ですが、異邦人が多く住んでいます。それから、ツロとシドンとあります、もうここにはフェニキア人またカナン人の地域です。ですから、ユダヤ人を越えて異邦人にまで噂が広まってきたのです。

9 イエスは、群衆が押し寄せて来ないように、ご自分のために小舟を用意しておくよう、弟子たちに言われた。10 イエスが多くの人を癒やされたので、病気に悩む人たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押し寄せて来たのである。

群衆が押し寄せてくるので、小舟からイエス様は御言葉を語られました。そして、癒しも行なわれました。少し異様にさえ見える光景です。イエス様ご自身は、宗教的にも、政治的にも迫害を受ける対象になっていると感じ取っておられたでしょう、またここに来る群衆がはたして、メシアを求めてきているのか、というところではありません。ご自身が来られた使命とは異なる方向へ、この動きが流れて行く危険があります。

11 汚れた霊どもは、イエスを見るたびに御前にひれ伏して「あなたは神の子です」と叫んだ。12 イエスはご自分のことを知らせないよう、彼らを厳しく戒められた。

カペナウムの会堂での悪霊追い出しにおいても、イエスが神の子であることを叫ぶところ、イエス様が厳しく戒められた場面がありました。霊の世界に生きている彼らこそは、イエスがそのまま神の子であるということを知っていたのです。けれども、イエス様はこの時点でそのことが知られたら、正しくご自身が伝えられることなく、全くの混乱状態で人々にご自身のことが伝わっていくことは必然です。主は、ご自身の数々の良い行いを通して、ご自身が確かに神の子であること、キリストであることを示したいと願われていますが、それがなく伝わって行けば、彼らの考えているキリストや神の子として祭り上げられ、伝えられていってしまう危険があります。それで戒められました。

3A 十二使徒の任命 13-19

そうした危険があって、そのつながりで、イエス様は十二人をご自身の弟子また使徒とされます。

13 さて、イエスが山に登り、ご自分が望む者たちを呼び寄せられると、彼らはみもとにきた。14 イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ、15 彼らに悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。

イエス様が十二人を選ばれるということは、そこから一つの統治が新たに始まるということです。主なる神がイスラエルを選ばれ、十二部族によって治められ、そして祭司の王国を建て上げようとされていました。そして、その神の統治を十二人の弟子たちによって成し遂げるようにお定めになりました。私たちはここに、秩序というものを学びます。神は、制度を立てることによってご自分の福音が正しく伝わることを意図しておられます。神が建てられた秩序としては、初めに結婚がありましたね。アダムを造られ、アダムからエバを造られました。そしてイスラエルがあり、今は十二人の弟子たちによって教会を建て上げ、それによってご自身の福音を広げようと意図されています。

パウロは、エペソ人に対して次のように言いました、「エペ 2:20-21 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。」そして使徒たちの教えというのがこの新約聖書とまた旧約聖書であり、教会によって今、神はご自分の福音を伝えようとされています。

まず目に留めなければいけないのは、「ご自分が望む者たちを呼び寄せられる」ということでもあります。彼らを選んだのではなく、イエスご自身によって選ばれ、召されたということです。イエス様は弟子たちに言われました。「ヨハ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」自分が自分の好きなことをするのではなく、主が命じられていること、主に語られていることによって、それで自分は出て行って実を結ばせることができるといいます。しかも、実が結ばれるだけでなく、実が残るようになるということです。ですから、私たちが福音宣教の働きをするには、主による召しということが必ず必要になります。

そして「使徒」と呼ばれていますが、これは「遣わされた者」という意味です。三つのことをイエス様は行われました。一つは「そばに置く」ということです。イエス様と時間を過ごすということです。イエス様は、独りになられて父なる神と時間を過ごされました。同じように彼らと時間を過ごすことによって、彼らがイエス様を知るようになります。そして、次に遣わされて、宣教をするということです。私たちはとかく、二重生活をしてしまいます。教会は教会、世の中は世の中というように。けれども、遣わされるというところに、自分がキリスト者としてキリストを代表する者として、その場に置かれているということにより、確かに世にいて、そこにいる人々に仕えますが、あくまでもそれは主にあって仕えるのです。そして三つ目に悪霊を追い出す権威です。霊的な力を与えられています。それをイエス様の御名によって行使することによって、確かにイエス様の言葉に力があることを証明

します。私たちにも、イエス様の御名が与えられています。御名による祈りには力があります。

16 こうしてイエスは十二人を任命された。シモンにはペテロという名をつけ、17 ゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。18 さらに、アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19 イスカリオテのユダを任命された。このユダがイエスを裏切ったのである。

ここに出て来る十二人は、実に人間味あふれる人々です。イスラエルの十二部族の父祖である、ヤコブの十二人も個性豊かでしたが、使徒たちも個性豊かです。まず初めに、ペテロがいつも出てきます。彼はピリポ・カイサリアで、イエス様によってこの名が与えられました。小さな石ということです。教会の指導者としてふさわしい名前です。彼が大きい存在ではない、小さな存在なのだ、けれども、小さき者を大きいことに用いられる神を証言するのだということです。彼が直情的で、大きな失敗もして、けれどもイエス様をこれほどまでに愛した人もいなかったでしょう。

次に、ヤコブとヨハネですが、漁師ゼベダイの子です。ヤコブはここで、使徒 12 章でヘロデ・アグリッパ一世によって殺される、十二使徒で初めて殉教する者となりました。ヨハネは最後まで生き残った最後の使徒になりました。興味深いことに、二人には「雷の子」という名が与えられています。ヨハネもヤコブも短気で、野心的な人でした。ヨハネは、イエスの名によって悪霊を追い出している者たちが自分たちの仲間ではないので、やめさせましょうか？と言いました。また、サマリヤ人でイエス様を拒んだ者たちを、天からの火で焼きましょうか、ということもいった人物です。また、母を通してヨハネもヤコブも、イエス様の右の座、左の座に着きたいとも言った兄弟たちです。あら、という感じですが、しかしこのヨハネが後に、立派な監督者となります。

そしてアンデレとピリポですが、どちらも冷静で、理性的な人でした。アンデレは、いつも人をイエス様のところに連れて行きます。ペテロをイエス様に、給食の奇跡の時に弁当を持っている少年をイエス様に連れてきました。それからギリシア人をイエス様に連れてきています。ピリポは、同じく五千人の給食で、「二百デナリのパンでは足りません」とイエス様にきちんと計算して、会計報告をするような人です！また、イエス様に「私たちに父を見せてください。」とお願いした人であり、とても理性的というか、知的です。それゆえの弱さもありました。そして、バルトロマイですが、これはヨハネ 1 章に出て来るナタナエルと同一人物とされています。彼はイエス様から、まことのイスラエル人と呼ばれたほどの人物でしたが、ナザレから何か良い物が出て来るだろうかと、気高い誇りのゆえに、そういった偏見を持っていました。

そしてマタイは取税人です。それから、トマスは、イエス様の復活を疑ったという疑い深さがあるし、空気が読めないというか、発言や行動が他の弟子たちとずれています。他の弟子たちが思っていて言うことを憚れるようなことを、そのまま言える人です。イエス様がラザロを生き返らせるために、ベタニアに行こうと言われたら、「私たちが死に行こう」と言いました。アルパヨの子ヤコブは、

特に何か彼の行動についての記録があるわけではありません。ダタイは、他の福音書でユダと呼ばれています。イスカリオテのユダではないユダです。イエス様に、「なぜ世にご自身を現わさないのですか。」と尋ねた人です(ヨハ 14:21-22)。そして熱心党員のシモンがいます。ユダヤ教には、サドカイ派、パリサイ派、そしてエッセネ派がありましたが、熱心党もありました。これは武力闘争によって、メシアが王となるユダヤ人の国を建てるという主張です。彼らこそが、66年から勃発するユダヤ人反乱を指揮した人たちです。それによって、70年にエルサレムとその神殿の崩壊を、招いてしまいました。その彼が、イエス様に熱心な者に転向したのです。興味深いのは、取税人のマタイと熱心党のシモンが選ばれている事。もしシモンがイエス様の弟子になっていなかったら、剣や刀で彼の腹を刺して殺していたことでしょう。取税人はローマの犬、裏切り者ですから。

そして最後に、「イスカリオテのユダ」が出てきます。彼は初めからイエスを信じていませんでした。彼は、「表向きは何の問題もないように見えて、裏で悪を行っている」者です。お金の管理を任されていたが、そこで自分のために横領していました。けれども、裏切る者がいるとイエス様が最後の晩餐の席で語られても、だれも彼だと分かりませんでした。イエス様は、彼が裏切ることを知っておられましたが、それが他の者たちには分からないようにしながら、悔い改める機会を何度もちかけます。けれども彼は裏切りました。そして後悔して自殺します。

このようにして、新しい秩序をイエス様はお造りになられるにあたって、こんなにも様々な背景のある者たちを呼ばれたということです。そして、このことは私たちに慰めと警告を与えます。それはいろいろな個性や性格、背景があり、欠点もある者たちをイエス様は敢えて集めて、ご自分の国を広げようとしておられるということです。もう一つは、ユダのように、初めから信じていないのにそれでも仲間に入っているという現実もあるということです。使徒の手紙には、偽教師や異端を持ち込む者たちの存在が数多く書かれています。

4A 新しい国と家族 20-35

1B 宗教指導者の中傷 20-30

20 さて、イエスは家に戻られた。すると群衆が再び集まって来たので、イエスと弟子たちは食事をする暇もなかった。21 これを聞いて、イエスの身内の者たちはイエスを連れ戻しに出かけた。人々が「イエスはおかしくなった」と言っていたからである。

マルコは、二つのグループを取り上げています。一つは、イエス様の肉の家族です。もう一つは、宗教指導者たちです。どちらも、群衆があまりにもたくさん集まって来て、イエス様と弟子たちが食事をする事もできない状況に対して反応しています。まず、イエス様の家族ですが、母マリアがもちろんいて、それからヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンがいます(マルコ 6:3)。ヨセフは、おそらくはもうこの時点で死んでしまったのではないか？と思われます。イエス様が成人してからは、名前が出てこないからです。このような状況であることを知って、50 *弱もある旅をわざわざしにいきました。「おかしくなった」といいますが、例えば道端で、たった独りでずっと話を続けて行く人であるとか、

そういう精神的なおかしさです。これは、私たちキリスト者が福音宣教に携われれば、最も近い人、肉の家族は特にそう思ってしまう。

例えば、最近のニュースで、インドのミャンマーに近い、北センチネル島で、原住民に殺された26歳の若者、ジョン・アレン・チャウさんのことです。石器時代の中にまだ生きているのではないかとと思われる人々のところに聖書を携えて福音を伝えようとするもの、上陸ができるかできないかのうちに殺されてしまったというものです。世界中のニュースになり、彼の行動に対してあらゆる方面から批判がありました。もちろん、何の用意もせずは無茶で行ったら非難は免れませんが、彼は十年前から、この部族の人々のために祈り、用意していました。言語や文化はもちろんのこと、その他の専門知識を得て、宣教団体によって厳しい審査を受けて、それから上陸する時にもワクチンも摂取して、これまで宣教師が未開人のところに行って行なってしまった失敗も十分に勉強して、加味して、それで出て行ったことがだんだん伝わってきました。多くの人が批判するのですが、彼はこれが無茶に見えることを良く知っていて、しかし彼らが、自分たちの言語で天において、神の御前で礼拝し、賛美するのを楽しみにしているということを、日記に記していました。

宣教は、このようにして無名の若者が先駆者となって、まだイエス様をちょっとだけしか宣言していないのに、殺されたということによって、進んでいっています。全く同じようにして昔、ジム・エリオットと他四名の若い宣教師がワダニ族に殺されました。彼らも26歳です。しかし、今、ワダニ族のほとんどがクリスチャンです。ジムを殺した男は、彼自身が牧師になりました。そして、朝鮮半島の初めてのプロテスタント宣教師、ロバート・トーマスは上陸して、「イエス！」と叫んだだけで、斬首刑で殺されました。彼も27歳で、ほぼ同年です。けれども、彼の投げた聖書を後で壁紙にした人が、その壁紙に書いてあることを読んでイエス様を信じて、後からきた宣教師によってフォローアップが行なわれ、斬首した人自身も信仰を持ち、それで朝鮮に大リバイバルが起こったのです。家族からしたら、これほど無謀なことはないし、悲しい出来事はないでしょう。信仰を持っている家族であれば理解できますが、信仰を持っていなければ無茶もいいところ、気が狂っていると思えないのです。

22 また、エルサレムから下って来た律法学者たちも、「彼はベルゼブルにつかれている」とか、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している」と言っていた。

もう一つのグループ、宗教指導者たちですが、「エルサレムから下って来た律法学者たち」であります。つまりユダヤ教の本部から来た、宗教権威を持った者たちが専門知識によってこのように見定めたということです。午前礼拝で学びましたが、彼らは彼らの前に、全く否定できない証拠や事実が突き付けられています。ですから、受け入れるしかないはずなのですが、心を頑なに拒むので、言うことがどんどんおかしくなります。奇蹟が起こっているのは事実なのです、それは受け入れるしかありません。しかし、その奇蹟からイエスが神からの方、キリストであることが明らかなのです。しかし、そのことを拒むがゆえに他の説明をすることによって、なんと悪霊をイエス様が

追い出しているのを、悪霊どものかしらによって追い出していると言い始めました。ベルゼブルとは、ペリシテ人の偶像の神のことでユダヤ人たちはそれをサタンに使っていました。

23 そこでイエスは彼ら呼び寄せて、たとえで語られた。「どうしてサタンがサタンを追い出せるのですか。24 もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません。25 もし家が内部で分裂したら、その家は立ち行きません。26 もし、サタンが自らに敵対して立ち、分裂したら、立ち行かずに滅んでしまいます。27 まず強い者を縛り上げなければ、だれも、強い者の家に入って、家財を略奪することはできません。縛り上げれば、その家を略奪できます。

イエス様は、彼らの言っていることがどれだけ、滅茶苦茶なのかを明確に語られています。悪霊追い出しのことを、明確に、国と国の衝突として捉えておられます。あるいは家と家の衝突です。神の国が、サタンの国に攻め入っているということです。悪霊どもがイエス様の事を、神の子ですと叫んでいるのはそのためで、はっきりと何が背後で起こっているかを彼らは当然、知っていたからです。今、サタンの支配という古い秩序の中に、神の国という新しい秩序が入り込んでいます。彼らの言い逃れは、サタンが悪霊を追い出しているというものですが、味方が味方と敵対しているというというのは、ちゃんちゃらおかしい話であり、ですからイエス様の悪霊追い出しは、神からのものという結論を出さざるを得ません。

そしてイエス様は、強い者を縛ってから家に入ることを語っておられます。悪霊を追い出され、病を癒され、そのようにサタンに囚われている人々を解放されているのは、まずその王国の頭であるサタンを縛り上げているからだということです。イエス様は、父なる神にあってサタンに対して戦っていることをよくご存じでした。福音書でその公生涯の初めと、イエス様が捕えられる時にサタンが出てきますが、背後にいる存在がちらほら出てきています。

28 まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒瀆することを言っても、赦していただけます。29 しかし聖霊を冒瀆する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」

イエス様が言われている永遠に赦されない罪とは、イエスが間違いなく神の子であり、キリストであられることを証しする聖霊の働きを拒む罪です。ヘブル書 10 章にこうあります、「10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。」イエスが間違いなく、その十字架によって罪の赦しの道を開いてくださったのだという証しを受けるとします。それは恵みの御霊の働きなのですが、その御霊の働きを受け入れないのであれば、どんどん自分が罪の赦しから遠ざかっていくことになります。

30 このように言われたのは、彼らが、「イエスは汚れた霊につかれている」と言っていたからであ

る。

家族のところには、「イエスが気がおかしくなっている」という知らせが届いていました。それで彼らがやってきていますが、それに加えて、その気がおかしくなっているということ、汚れた霊にかかっているといつて中傷していたのです。これは本当に酷いですね、精神的におかしくなっただけでなく、それを汚れた霊によってそうなっているとそしていました。

2B 家族の無理解 31-35

31 さて、イエスの母と兄弟たちがやって来て、外に立ち、人を送ってイエスを呼んだ。32 大勢の人がイエスを囲んで座っていた。彼らは「ご覧ください。あなたの母上と兄弟姉妹方が、あなたを捜して外に来ておられます」と言った。

彼らが長い距離を歩いて来て、ようやく到着し、イエスを引き取ろうと思いました。精神的におかしくなってしまったのですから、家に引き取らないといけないと思ったのです。けれども、その中にも入れなくなっています。

33 すると、イエスは彼らに答えて「わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか」と言われた。34 そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。35 だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」

イエス様は、新しい秩序について、神の国だけでなく、神の家族も語られました。私たちがイエス様を信じることによって、神の御国に移されただけでなく、新しい神の家族の中の一部になりました。それは、神のみこころを行うことによって、結ばれている仲です。

イエス様は肉の家族をないがしろにしているわけではありません。後に十字架に付けられている時に、マリアの隣にいたヨハネに、彼女の世話をするように遺言を残されました。そうではなく、神のみこころを行う時には、それが最も大事なものになるということです。先ほど話したように、肉の家族には到底理解できない決断を、イエス様にあつてしなければならない時があります。私たち自身も、ある宣教地で働きをしていた時に、両親にはその国名さえも告げないで行きました。信仰を持っていましたが、それがどれだけ辛いことであつたかは想像に難くありません。

これが神のみこころを行う仲にあるものです。そこには肉の家族よりも深いつながりがあるのです。もちろん肉の家族には肉の家族のつながりがあります。それはとても尊いものです。しかし、もっともつ深いつながりです。どうか、福音の真理によって、私たちの心が清められますように。神のみこころを行うことによって、どんなつながりにも増して、同じく福音に触れている者たちの間にあるつながりが、どれだけ深いのかを知ることができますように。